

UWC の概要

2022年9月
(公社)UWC日本協会

1. UWCのプロジェクト

UWC (United World Colleges) は、世界各国の国内委員会 (UWC National Committees) が選抜・派遣した生徒 (日本の場合、派遣時、高校2年生) を中等教育期間終了前の2年間受け入れ、国際感覚豊かな人材を育成することを使命としている。

UWCの本部はロンドンにあり、その運営は常任理事会 (UWC Executive Board) があたっている。国際理事会 (UWC International Board of Directors) と5年ごとに開催される国際評議員会 (International Council) は、UWCの運営について助言を行っている。

UWCの最初のカレッジは、1962年に開校したイギリス校である。その後、カナダ校 (1974年)、シンガポール校 (1975年)、エスワティニ校 (1981年)、イタリア校 (1982年)、アメリカ校 (1982年)、ベネズエラ校 (1988年、2012年閉校)、香港校 (1992年)、ノルウェー校 (1995年)、インド校 (1997年)、コスタリカ校 (2006年)、ボスニア・ヘルツェゴビナ校 (2006年)、オランダ校 (2009年)、ドイツ校 (2014年)、アルメニア校 (2014年)、中国校 (2015年)、タイ校 (2016年)、日本校 (2017年)、タンザニア校 (2019年) が開校し、現在、18校のカレッジがある。UWCは今後も世界各地にカレッジを開設していく計画を持っている。UWCは国際感覚豊かな有能な人材を多数養成しており、国際的な相互理解という点でも大きな貢献を行っている。

2. UWCの組織

(1) UWC会長 (UWC President)

UWC会長は、ヌール ヨルダン王妃が務めている。UWC会長はUWCの国際組織、すなわち国際評議員会、理事会、各国国内委員会、各カレッジを大所高所から積極的に指導する。

(2) 国際評議員会 (UWC International Council)

イギリス校の成功により、他の国々からもこのようなカレッジ設立を要望する声が多く出された。そこで、1967年に各国の著名人を集めて国際評議員会が組織され、英国のマウントバッテン伯爵がその初代会長となった。その後、1978年にチャールズ英国皇太子が、1995年にはマンデラ南アフリカ共和国大統領がヌール ヨルダン王妃と共に就任した。現在は、ヌール ヨルダン王妃が務めている。同評議員会は5年毎に開催され、UWCの事業と運営に関して助言を行っている。

(3) 国際理事会 (UWC International Board of Directors)

国際理事会は、有識者や各カレッジの校長、卒業生ネットワークの代表などから構成されるUWCの運営組織である。具体的には、UWCの運営、運営に関する政策の立案・実施、UWCの各カレッジへの協力・支援などを行っている。わが国からは、過去に、ジャパントイムズの小笠原敏晶会長およびソニー盛田昌夫業務執行役員SVPが国際理事を務めた。

(4) UWC国内委員会 (National Committee)

各国に設立された国内委員会は、UWC国際評議員会の一部を構成し、各国におけるUWC活動の普及、UWCに派遣する生徒への奨学金の募金、および各カレッジに派遣する生徒の選抜・派遣に関する責任を負う。

<UWC日本協会 (UWC Japan National Committee)>

UWC日本協会は、UWCの日本国内委員会として1972年に設立され、当時の経団連会長であった植村甲午郎氏が初代会長に就任した。同会は1975年に社団法人ユナイテッド・ワールド・カレッジ日本協会に改組、2012年4月1日より公益社団法人に移行している。

1978年にはソニーの盛田昭夫会長が第2代会長に、1995年にはUWC国際理事であるジャパントイムズの小笠原敏晶会長が第3代会長に、1999年に全日本空輸の野村吉三郎社長が第4代会長に、2007年に朝日生命保険の藤田讓社長が第5代会長に、そして、2022年にアサヒグループホールディングスの小路明善会長が第6代会長に選任され、現在に至っている。

設立以来、UWC日本協会は、UWCの日本での窓口として、UWCの趣旨に賛同し、日本協会の会員となっている会員企業(現在56社および個人)から奨学金の原資となる寄附金を集めるとともに、奨学生の選考、派遣に関する業務などを行っており、これまでに700名近い生徒を全世界のUWCのカレッジに派遣している。設立当時から、経団連が事務局を務めている。

※本項の役職名は、就任時のもの。

3. カレッジにおける教育

カレッジでの教育は、世界の多くの大学で入学資格として認められている国際バカロレア (International Baccalaureate = IB) のカリキュラムにのっとり、各国から招聘された優秀な教師陣が授業を行っている。生徒たちはこのIBのディプロマを取得すべく、勉学に励んでいる。

一般に各IB科目の要求水準は高く、幅広い知識とともに深い理解力・洞察力が要求される。これに対して、カレッジ側の生徒への配慮は大変きめ細かい。カレッジの担当者が、定期的に勉強の進み具合を確認し、学習方法、進路指導、その他生活一般について生徒を指導する。授業は少人数のクラスで行われ、活発な討論を交えた密度の濃いものとなっており、科目によってはゼミ形式が採られたり、自主研究が課せられたりすることも多い。また、UWCが国際的な学校であることから、授業で扱われる問題も国際的なものが多く、授業での活発な討論

を通じて、教科書からは得られない多くのことを学ぶことができる。こうした環境のなかで、生徒たちの知識と判断力が向上していく。

また、社会への奉仕活動にも熱心に取り組んでいる。IBのプログラムの一環として、社会福祉・海難救助・山岳救助・海洋生物調査・森林整備などの活動を行っている。奉仕活動は定期的に行われており、カレッジでの生活において重要な役割を果たしている。これらの活動はUWCならではのもので、日本の高校では経験しがたいものが多い。青年期におけるこうした経験は、責任感や友情を育て、地域社会との交流にも役立っている。また、奉仕活動を通じて、生徒たちはカレッジの理想とする国際理解をさらに深めている。

奉仕活動のほかに、各生徒はIBのカリキュラムに従って、芸術系と体育系のアクティビティ（日本のクラブ活動に相当）に参加することが奨励されている。

(* 国際バカロレア (The International Baccalaureate = IB) については別紙参照)

4. 日本協会から近年派遣実績のあるカレッジの紹介(派遣開始年順)

(1) イギリス校 (UWC Atlantic College)

英国はウェールズの首都カーディフから西に約40km、ブリストル海峡に臨む位置に、イギリス校がある。イギリス校は1962年、英国空軍中將ローランス・ダーヴァル卿、クルト・ハーン博士、そして初代学長となったデズモンド・ホール氏など有志の尽力により、最初に設立されたUWCの学校である。当初は男子生徒のみで開校し、カリキュラムも英国の教育制度に沿ったものであったが、1969年に男女共学となり、1971年からは国際バカロレアのカリキュラムを採用した。

イギリス校の中心となる建物は13世紀に建てられた古城で、現在ここには大ホール、食堂、図書室、集会場などが置かれている。まわりには近代的な校舎、実験室が散在し、生徒は授業ごとにそれぞれの教室に移動する。生徒数は約360人、国籍は70カ国にわたっている。また、生徒全員のための寄宿設備として8つのハウス(寮)がある。各ハウスは原則として1階に男子生徒、2階に女子生徒というように分かれており、簡単なキッチンがついた団欒のための部屋(ダイニングルームと呼ばれる)がある。各ハウスには寮監督の教師とその家族が住み、生徒の学習や生活面の指導を担当している。他の主な施設としては、生徒たちの憩いの場であるソーシャル・センターやアート・センター、屋内・外プール、テニスコート、沿岸パトロール基地、牧場などがある。

(2) カナダ校 (Pearson College UWC)

カナダ太平洋岸、アメリカとの国境に近いバンクーバーからフェリーで1時間半南下すると、バンクーバー島のヴィクトリア市に到着する。そこからさらに車で1時間、ペダー湾に面したカナダ校が視界に入ってくる。カナダ校は1974年

に設立され、設立に尽力したカナダ元首相でノーベル平和賞を受賞した故レスター・B・ピアソン氏の名前を冠している。生徒数は約160人、国籍は5大陸100カ国にわたっている。

カナダ校の特色は、学校をひとつの共同体、もしくは「村」として運営していることである。また、生徒の自由とそれに付随する責任を最も重視しているため、規則と名のつくものは存在しない。

寮は「ハウス」と呼ばれ、カナダの有名な建築家R・J・トム氏の設計により、教師と生徒が家族的な雰囲気、勉強や生活ができるようになっている。ハウスは周囲の美しい自然にマッチした山小屋風の建物で、うちひとつは、日加両国の友好親善を図るために日本政府と企業の支援により建設されたもので、「ジャパン・ハウス」と名付けられている。

それぞれのハウスは、1階に女子生徒、2階に男子生徒というように分かれている。また、ひとつの部屋にはなるべく異なる文化圏の生徒を入れることを原則としている。このほか、デイルームと呼ばれる居間、洗面所、洗濯室、教師とその家族の部屋がある。デイルームは昼間は教室、夜は生徒たちの団欒室となる。また、22時30分以降は他の生徒の部屋への訪問は禁じられ、それ以後の用談、懇親等はデイルームなどを使用することになっている。

(3) イタリア校 (UWC Adriatic)

イタリア校は、ベニスから車で2時間ほどのドゥイノ村にある。ドゥイノはアドリア海に面した閑静なリゾート地で、スロベニアとの国境にも近い。

イタリア校は1982年、UWCで初めて英語圏外の国に開設された。そのため、他校とは異なるいくつかの特徴が見られる。そのひとつは、生徒総数約190名のうち約3割をイタリア人が占め、イタリア語が必須科目となっていることである。しかし、IBでイタリア語を選択するかどうかは本人の自由である。また、キャンパスというまとまった領域がないのも大きな特徴である。校舎、図書館、寮などの施設は村の中に点在して、ドゥイノ村自体があたかもキャンパスであるかのような雰囲気を醸し出している。

朝食はそれぞれの寮のキッチンでとり、昼食と夕食は食堂でとることができる。運動場やプールといった設備はないが、地域のグラウンドや体育館、プールを使用できる。また、夏になれば、専用のビーチで泳ぐこともできる。

寮の中には個人の家を改築したものもあり、それぞれの寮が独自の雰囲気をもっている。寮にはハウスマスターがいて生徒の生活を指導しているが、厳しい規則はほとんどなく、生徒は自分の家にいるようにのびのびと生活している。

イタリア校がドゥイノという村の中に存在することの意味は大きい。村人と接する機会が多く、外界と孤立することなく、イタリア社会のなかに自然に溶けこんでいるからである。

(4) アメリカ校 (UWC-USA)

アメリカの実業家故アーマンド・ハマー氏の尽力により1982年に設立されたアメリカ校は、ニューメキシコ州のアルバカーキから北へ150km、車で3時間ほどのロッキー山脈の中腹の町モンテズマに位置する。生徒総数は約200人、国籍は70カ国以上に及ぶ。

100年ほど前にホテルとして建てられたモンテズマ城を中心に、その周囲に4つの校舎と購買部などが置かれたキャンパスセンター、6つの寮、さらにテニスコート、バスケットボールコート、サッカー場、Hot Springs (温泉) など各種設備が整っている。また、それぞれの寮のデイルーム (居間) には台所用品や洗濯機、乾燥機、アイロンなど、生活に必要なものが一通り揃っている。寮ごとのミーティングやパーティーもここで開かれる。

海のないアメリカ校での野外活動の中心は山岳活動である。また、週末には各種のスポーツ大会、キャンプ、スキーツアーなどがあり、自由に参加できる。

さらに、学業やスポーツだけでなく、生徒の国際社会に関する幅広い知識の習得にも重点を置いており、これに関係した行事が多い。例えば、各分野の専門家を招いたり、生徒自身が自国の現状や問題点について語ったりするなどして、毎週違ったテーマで討論会を開いている。

地域の人々との交流は、他校同様、社会奉仕活動や文化活動を通じて行っているが、“Get-Away Family” と呼ばれるプログラムもある。これは、生徒一人ひとりが近くの町にホストファミリーを持ち、週末など暇な時にホストファミリーを訪れ、自由に交流を深めるというプログラムである。

(5) 香港校 (Li Po Chun UWC)

香港校は、香港の実業家 リ・ポ・チュン氏と香港政府の協力により設立され、1992年9月に開校した。静かな住宅街である新界 (ニュー・テリトリー) の沙田地区にあり、緑に囲まれたキャンパスから美しいトロ湾を望むことができる。

現在、約230名の生徒が在籍し、IB教育を受けている。生徒の約30%は中国人で、残りは世界中から集まった生徒たちである。20名余の教師も世界中から招聘され、校内にある住居で家族とともに生活している。授業は全て英語で行われるが、非中国語圏からきた生徒は、第2外国語として中国語を学ぶことを奨励されている。社会奉仕活動は、恵まれない子供たちの施設や老人ホームの訪問が行われている。課外活動では、水泳、ヨット、カヌー、クロスカントリー、登山、オリエンテーリングなどのスポーツが行われている。また、3月のプロジェクト・ウィークには、生徒の半数以上が中国旅行に出かけている。

カフェテリア式の食堂、キャンパスストア (購買部)、テニスコート、グラウンドなどの設備が整備されている。また、プール、図書館、コンピュータ装備のAVルーム、実験室等が授業や自主学習で利用される。校舎は広々とした近代的な建物で、中庭に日本庭園をつくることも検討されている。寮は男子寮と女子寮に分かれており、海外から入学した生徒のほとんどが入寮している。

(6) ノルウェー校 (UWC Red Cross Nordic)

ノルウェー校はノルウェー政府、赤十字の協力により設立され、1995年に開校した。オスロから北西約300kmのフィヨルドを臨む風光明媚なフレック・フアーレルに位置している。

生徒は約200人。講堂とカフェテリアが一緒になった“カフェトリウム”、図書館、実験棟ほか科目分野ごとに分かれた教室、生徒が暮らす寮など13の施設がある。それぞれ石造りの小道でつながれ、校長始め教師、生徒が共同生活をしている。校舎や寮など建物の概観は、地域の風景と調和するよう、時代ごとの伝統的なノルウェー西部の木造建築で統一されている。一方、内部は中央管理の空調システム、情報通信システムなどが導入され、快適な学校生活を送ることができる環境が整備されている。

特徴は、ノルウェー、人道、環境を3つの柱としていることである。北欧出身でない生徒は、初級ノルウェー語を勉強することとなっている。また、学校名に赤十字の名前が冠されているとおり、校舎は「赤十字リハビリテーション訓練センター」と併設され、救護やライフセービングなどの活動の機会がある。また、先の特徴とも関連し、生徒は「環境システムと社会」「開発学」「グローバル政策」などの科目を取得することが奨励されている。

(7) オランダ校 (UWC Maastricht)

オランダ校は、2009年に、既存の二つのインターナショナルスクールの統合によって設立された。マーストリヒト市東部に立地しており、2013年秋には、新キャンパスが完成し、初等部から高等部の全生徒が通学する学校と学生寮が同じ敷地内に建設された。新キャンパスは地熱発電や雨水の再利用等、環境へのインパクトやエネルギー消費量等に配慮したものとなっている。

生徒数は現在、約900名(大半は通学生)。ディプロマ課程には約300名が在学し、約180名が寮で暮らす。初等部から高等部までの全学生がコミュニティ・サービス・プログラムに参加するが、都市に立地しているため、学生が参加するコミュニティ・サービスは非常に多岐にわたる。コミュニティ・サービスには学生のみでなく教師も参加し、学生の監督にあたっている。

(8) ドイツ校 (UWC Robert Bosch College)

2014年秋に開校したドイツ校は、20世紀のドイツの起業家・教育者で、後に世界的な自動車部品メーカーとなった「ロバート・ボッシュ社」を創設した故ロバート・ボッシュ氏の生誕150周年を記念して設立計画が始まった。ボッシュ氏は、教育を通じ国際相互理解と国際協調を信じていた。

ドイツ南西部のフライブルグ市に立地し、学校には、ロバート・ボッシュ社・同財団からの4千万ユーロの寄附金により、14世紀に建てられたカルトゥージオ修道会の建物を改築した建物と、新規に建設された寮や校舎があり、最新の教育設備を有する。

ロバート・ボッシュ氏および同財団の精神にのっとり、環境問題、特に革新的技術を通じた生態系の保全やサステナビリティを重視している。2014 年秋から毎年 100 名の生徒を迎えており、内、25 名はドイツ国内の生徒となっている。

ドイツの Fraunhofer Institute と連携し、環境変化等に適応する持続可能な未来都市の有り方について研究する “Morgenstadt Initiative” に参加しており、同イニシアティブでは、東京が持続可能な都市の有り方を考えるうえで示唆を与える 6 つのグローバル都市の一つとして選ばれているため、東京出身であることが条件とされる年もある。

(9) アルメニア校 (UWC Dilijan)

アルメニアは世界最古のキリスト教国であり、1991 年に旧ソビエト連邦から独立した共和制国家である。ディリジャンはアルメニアの首都エレバンの北東に位置する美しいリゾート地で、アルメニア校は、2014 年秋、アルメニア人企業家であるルーベン・バーダンヤン氏とその妻ベロニカ・ゾナベンド氏らの支援によって、ディリジャン国立公園内に開校した。

アルメニアはアジアとヨーロッパの間に位置し、オスマン帝国によるアルメニア人大虐殺、ソ連時代のスターリンによる政治的抑圧である「大粛清」など、多くの悲劇を経験した国でもある。学校設立に寄与したゾナベンド氏は、同校創設により、「教育を通じて、人々、国家、文化を結びつけ、持続的平和と持続可能な未来を実現する」という UWC の理念が、アルメニアで実現することを期待している。

アルメニア校は UWC の中でも最高水準の施設・設備を有しており、校舎は 9 つの実習室、図書館、多様なオープンスペース等を備え、特にアート系の設備が充実している。また、豊かな自然を生かし、ハイキング、ロック・クライミング、湖でのスポーツ、スキーなどのアウトドア活動が行われている。また、ディリジャンの地元の人々とのコミュニティ活動にも力を入れている。

(10) 中国校 (UWC Changshu China)

2015 年に開校した中国校は、上海浦東国際空港から特急電車で約 2 時間の Changshu (常熟市) に位置する。常熟市は、3 千年の歴史を持つ人口約 100 万人の県級市であるが、キャンパスは昆承湖のほとりの自然豊かな環境にある。

2 年の IB 課程と 1 年の IB 準備プログラムを提供しており、16 歳～19 歳の生徒約 450 名が全員寮で共同生活を送っている。

特色として、3 本の柱 (中国言語と文化、社会起業家精神、環境問題における行動主義) をかかげ、日々の授業にも反映されている。

施設は、多機能ホール、スイミングセンターやランニングトラックを含む屋内体育館、理数科目に特化した STEM センター、図書館や食堂などがある。

(11) 日本校 (UWC ISAK Japan)

開校当初より変わらない「社会にポジティブな変革をもたらすチェンジメーカーの育成」を理念とし、自分や社会にとって大切なことを見極め、困難な状況において行動を起こし、多様な価値観を受け入れ、仲間を信じサポートできるリーダーの育成を目指している。

現在の代表理事・小林りんと、発起人代表・谷家衛の出会いをきっかけに、100名のファウンダー(発起人)の支援によって、2014年にインターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢(ISAK)として開校、2017年にはUWCに加盟し、ユナイテッド・ワールド・カレッジ ISAK ジャパンへ改名した。

キャンパスは軽井沢という大自然に恵まれ、また、東京へ1時間という都市へのアクセスにも優れた場所に位置する。アウトドアエデュケーションでは、キャンプやハイキングはもちろん、冬になるとスキーやスノーボードなど軽井沢ならではのアクティビティが充実。CASのプロジェクト(リーダーシッププロジェクト)では、現在、国内外で活躍している起業家やリーダーが、アドバイザーとしてサポートにつき、実社会で通用するプロジェクトマネジメントやリーダーシップについて学ぶことができる。

5. UWC国際本部・日本協会事務局の所在地とホームページアドレス、および上記カレッジを含む各カレッジを紹介するHPアドレス

UWC国際本部・事務局 (UWC International Office)

Third Floor, 55 New Oxford Street, London WC1A 1BS, United Kingdom
[Internet] www.uwc.org

公益社団法人 UWC日本協会(UWC Japan National Committee)

東京都千代田区大手町1-3-2 経団連事務局内

TEL: 03-6741-0163 FAX: 03-6741-0351

[E-mail] uwc@keidanren.or.jp

[Internet]

<https://www.keidanren.or.jp/japanese/profile/UWC/index.html>

UWC紹介ホームページURL ※各カレッジの様子が写真等で確認できます。

<https://www.jp.uwc.org/>

以上